

キリスト者の断食とファリサイ的偽善

キリスト者が避けなければならない罪としての偽善を教えるために、主イエスが語られた第3の例は「断食」である。断食は、愛の施し及び祈りと共にイスラエル宗教の三大支柱であった。神の民イスラエルは、毎年第七月十日の「贖罪の日」（ヨーム・キップール）に断食して神の前に罪を懺悔することが求められ、また、それ以外にも、悔い改めと祈り、或いは神の特別な導きまたは祝福を求めて主の前に断食を行なった（レビ16：29～31、ネヘミヤ9：1～2、ダニエル9：2以下参照）。

しかし、この聖なる行為としての断食も、時とともに形式化し（イザヤ58：1～12）、後には、断食自体に功德があると考えられるようになり、断食日は更に増加された。新約時代には、ファリサイ人たちは週2回断食を行なっていて、それがファリサイ人らの誇りとなっていた（ルカ18：12）。

主イエスは、そのようなファリサイ人の断食行為を念頭に入れて厳しい言葉を語られた。ここで主は、断食を否定されたのではない。主ご自身、メシアとしての公生涯を開始される前に断食され（マタイ4：2）、また初代教会の指導者たちも断食と祈りをもって主に仕えたことが記されている（使徒13：2～3、14：23）。主イエスがここで糾弾しているのは、断食によって、その敬虔さを人々に見せびらかし、人々から賞賛を得ようとするファリサイ的偽善なのである。

断食とは、単なる体の訓練である食事の節制や制限とは違い、宗教的目的のために、一時的に食物その他の必要なものを断つことである。すなわち、食を断つことによって体と精神を空しうして、自分の全存在を神に集中させそのようにして神の前に己れを低くし、己れを献げ、神の赦しと恵みと導きを求め、或いは、神との親しい交わりを求める行為なのである。

キリスト者は「愛の業」において「祈り」において、そして「断食」において、聖なる神の前に一対一で相対するのであり、それゆえ、他人の目を気にしたり、人々の賞賛を求めるようなことをすべきではない。さらに、自分自身さえ忘れ、ひたすら神ご自身に思いを集中し、神からのみ賞賛と報いを期待すべきであると、主は言われるのである。神は隠れたことを見ておられるお方であり、そのお方の前に常に真実で誠実であることを求めておられるのである。

ところで、「断食」は「食を断つ」と書くが、聖書のいう断食は、必ずしも「食物」を断つだけではないであろう。私たちが、常日頃、生活する上で必要なもの、或いは必要と思っているもの――それが何であれ（例えば、仕事であれ、交際やレジャー、趣味や娯楽であれ）そういう、言わば「肉体的精神的」食をも一時断ち、或いは節制し、静かに神の前に己れを正し、神に近づき、神を思い、神に祈る、そういう瞑想の時、静思の時、祈りの時また霊的断食と呼ぶことができる。

この多忙な時代、私たちにはそういう霊的断食の 때가絶対に必要である。特に、一週の中の一週、この世の業を休み、神のために己れを聖別し、神の家（教会）に集って共に礼拝をささげる、そして神の祝福を頂いて新しい一週の生活へと踏み出して行く。これこそ断食にふさわしい行為である。